『学習院大学　経済論集』第28巻　第78号（1991年10月）

【書評】

『真実』を直視する目

——杉山隆男「きのうの祖国」（講談社）における危機意識への共感と旧東ドイツ経済の遠い道のり——

小　山　　明　宏

1．はじめに

あれほど騒がれた東西ドイツの統一から，早くも1年の歳月が流れようとしている。当時，旧東ドイツの国民たちからほとんど「救世主」のような扱いを受け，ほめそやされた連邦首相，ヘルムート・コールの人気も，今や落ちも落ちたり，ついには5月10日，人気の巻き返し，及び事態の説明・視察のためにわざわざ自ら訪れたザクセン・アンハルト州のハレ市では，失業の増大，物価の上昇などに業を煮やした若者たちに生卵やトマトをぶつけられるという珍事が起こった。この時，コール首相自身がかんかんに怒り，逆につかみかかろうとしてあわや乱闘騒ぎになるところだったというのは，旧東ドイツ地域の票に対するコールの思い入れの大きさを差し引いたとしても，突き詰めて考えてみれば，コールに代表される旧西ドイツ連邦政府の，旧東ドイツ地域に対する認識不足，及びそれが明らかになったことによる焦り，そして一方，旧東ドイツ住民たちの側での，資本主義経済体制への認識不足，および意識変革が進んでいないこと，この2つが，未だにそり合わずに衝突していることの証拠であると言えそうである。すでに報道されているとおり，4月に行われた，コール首相のお膝元であるラインラント・プァルツ州の州議会選挙では，何と連邦与党CDU（キリスト教民主同盟）がSPD（社会民主党）に敗北を喫し，しかも44.8%（SPD）対38.7%（CDU）という思いがけない大差がついたのである。ラインラント・プァルツ州南部の工業都市ルードヴィヒスハーフェン出身のコール首相としては，言うまでもなく，我慢のならない結果だったであろうし，ラインラント・プァルツ州のCDU自身にも問題があったのであろうということを考えても，自らの支持率の凋落傾向に対して危機感を強め，現時点では旧東ドイツ5州のうち4州でCDUが政権を担当していることに望みをつないでいるのも，うなずけることである。

統一の日，ベルリンのブランデンブルグ門の前の広場に押し寄せた群衆の中にいた，おそらく旧東ドイツ市民と思われる人々が，'Helmut, ich danke dir!' などと書いたプラカードを掲げて大喜びだったのを，偶然当時ドイツにいた筆者はテレビの実況中継でまのあたりにして，ふーん，そういうものかなあ，と思ったのをはっきりと憶えているが，それから1年も経たないうちにこんなことになるとは，世の移り変わりの早さもここに極まれりという気持ちでいっぱいである。

ただ，さきにも述べたように，コール首相に代表される旧西ドイツ連邦政府の，旧東ドイツ地域に対する認識不足，及びそれが明らかになったことによる焦り，そして一方，旧東ドイツ住民たちの側での，資本主義経済体制への認識不足（そして，実は起こっている抵抗），および意識変革が進んでいないこと，この2つは，今後のドイツの政治・経済の立ち直りを左右する重大なファクターであり，誰もが認める，現在のドイツのアキレス腱で

あるといえる。すなわち,『真実』をそのまま見つめ，予見を排して，正しい危機意識を持つことがいかに重要なことであったか，そして今後もそのような危機意識を常に保ちながら，真実を見つめ，個人的損得計算，あるいは密かな打算にもとづく無責任な楽観論をいかに排除して，適切な方策をとりうるかにすべてがかかっていると思われる。

杉山隆男著「きのうの祖国」（講談社，1990年12月刊）は，この点で，元新聞記者としての公平な倫理観により，金儲け主義に毒されない目で旧東ドイツ地域の惨状を直視し，当然の危機意識を持ってレポートを行った，優れた記録であるといえる。ここでは，同書の訴えるものを，私自身の旧東ドイツ紀行で得た認識ともあわせて紹介し，また，経営学的センスをもまじえて，そこでの議論を再考察してみたい。

2．「地図から消えた国」と「消えない過去」の悲劇

2－1　「開放」とその裏側

著者，杉山隆男氏は，本書を1990年12月に公刊するにあたり，ベルリンの壁が崩れた1989年11月を期に，旧東ドイツを始め，ルーマニア，ハンガリー，チェコなどを自ら訪れて自分の足で情報を収集して巡った。本書はそのような著者の情報収集旅行において，おそらくとりわけ重要な考察対象であったと思われる，①旧東ドイツ，そして，②ルーマニア，の2つの国に関する叙述を中心に，全体が構成されている。すなわち，全体は大きく分けて2部からなり，

第1部　地図から消えた国

第2部　地図にない国

という構成になっている。このうちの第1部が主として旧東ドイツに関する叙述の部分，第2部が主としてルーマニアに関する叙述の部分である。このうちの第2部については，筆者（小山。以下，「筆者」とは小山を指し，「著者」とは本書の著者，杉山氏を指す）自身も，ドイツ，ラインラント・プァルツ州トリアー市，トリアー大学に滞在中に，やはり同大学に滞在していた国立ブカレスト経済大学のヤコブ・ケルバレク・ディマ教授と知り合い，ルーマニアの経済，および経営に関する情報や示唆をいただいたが，なにぶん自らの目で確かめた情報がなく，伝聞情報ばかりであるため，本書の第2部によってまた新たな刺激を得ることができたということのみを記し，ここでは筆者が自らの目で見た旧東ドイツのようすを頭に置きながら，第1部での叙述を再考察するという形式で進めることにしたい。

本書の第1部は，さらに次のような部分からなっている。

プロローグ

第1章　開放

第2章　脱出

第3章　再会

それぞれの章に，中心人物と呼べそうな実在の人物を立て，その人物をめぐる，ベルリンの壁の崩壊以前とそれ以後の境遇，ものの考え方，そして社会への（社会からの）影響などの変化を，クロノロジーふうに，実におもしろく書き綴っている。紹介が遅れたが，著者，杉山隆男氏は，1986年度大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した，その意味ですでに名のあるノンフィクション作家である。同氏はもともと読売新聞の記者であり，一橋大学社会学部時代は社会心理学の南博教授のゼミに所属し，また「一橋マーキュリー」という学内雑誌を創刊して，自らその編集委員長として活躍した人物である。

さて，第1部第1章　「開放」は，おもに1989年11月9日の，ベルリンの壁の突然の崩壊を，旧東ベルリンの住民であるトーマス＆カトリン・シュミット一家，およびミリアム・ウルブリッヒ嬢がどのようにして迎えたかを，いわばドキュメントふうに記し，その

本論文冒頭

あとで，彼らそれぞれが，それをどのように受け止めたか，それはどうしてか，すなわち，どのような生い立ちを彼らが持っていて，そのような生い立ちがどのように，壁の開放に対する彼らの反応に影響を及ぼしたかを，生々しく記している。このような展開は，本書全体にわたってとられているものである。第1部の3つの章の中では，この第1章に登場する人物たちは，壁の開放の影響を比較的ポジティヴに，あるいは，ズバリと言ってしまえば，有利に受けられるグループに属する。トーマス・シュミットは建築家であり，またその妻カトリンは，英語および（なんと！）日本語の通訳を務める，社会体制が180度変わってしまっても，とりあえずは，堤防が破れたことによって押し寄せてくる荒波を最前列でもろに受けることはせずに済む人たちであるし，ミリアム・ウルブリッヒは，「東ドイツ映画テレビ制作大学」を卒業し，映画プロデューサーとして自己実現を図ろうと活動をし始め，壁に突き当たった矢先だからである。そして，ここに，明らかに，旧東ドイツ人の今後の人生を大きく左右する2行2列の分類が存在することがはっきりしてくる。それは，筆者の考えでは次のような分類表にまとめられ，本書を読み進むにあたり，登場人物を考える，非常にわかりやすい基準となる。

表1　旧東ドイツ市民の2次元分類

従来の体制に満足していたか，あるいは批判的で，国外脱出を考えていたか

立場の、特権を持つ者であるか か、あるいはSEDと繋りを持った職業・現在ついている職業が国家と密着している	従来の社会体制に満足し特に自分の現状に不満はない。国外へ脱出しようなどとは思わない。	現状に不満を持ち，社会の変革が必要であると考えている。国外へ逃亡的に脱出したいと思う。
専門職であっても国内で自ら満足できる職業につき，それに関する保証も得ている。	A	B
自らの能力を十分に生かせる職業に就いておらずしかも，その職業もかなり制約をつけられている	C	D

この表のような分類に異論を唱える向きもあるかもしれない。おそらく出される批判としては，タイプBやタイプCの人間がはたして，目立つほど存在するかどうか，という疑問である。結論を先に述べれば，タイプCの人間を大量に作り出そうとしていたのが，旧東ドイツの（思想）教育であり，タイプBの人々までが立ち上がったことによって，ついにホーネッカー政権は倒れたのだと，筆者は考えている。

第1章「開放」に登場する人物たちのうち，シュミット一家はまさにタイプBに属す

本論文冒頭

るし，ミリアム・ウルリッヒ嬢はタイプDに属する。シュミット一家とは言っても，ここで対象としてもっぱら取り上げられているのは妻のカトリン・シュミットであるが，彼女は「壁」が築かれたときはまだ2才で，「壁」の意味については，学校へあがってから文字どおり政府が作ったプログラム通りの教育により，徹底的に社会主義社会の規律やマルクス・レーニン主義の考え方を身につけ，その上での判断を行っていたのである。しかも彼女は自由ドイツ青年同盟(FDJ)の学校代表（書記長）に選ばれるほどのエリートであったわけで，さらにそのなかでのエリートであるSEDの党員になることさえできたのである。ところが彼女は入党申請を出さなかった。彼女は旧東ドイツの国家体制が持つウミをまともに浴びてしまったからである[1)]。

病気がちで，床に臥していることが多かったカトリンの祖母が，設備が整った完全看護体制の養老院に入ったまでは良かったのだが，遠く，国境地帯にある養老院であったため，訪問には警察の許可が必要だったのである。ところがおり悪しく，両親が旅行に出た，しかも金曜日の夜，祖母の容態が急変したという知らせを，留守番中の彼女は受ける。翌土曜日朝，彼女は警察を訪れ，訪問ビザの交付を願い出るが，「担当者が今日はいないから，明後日来なさい」という警官のバカな返事で，彼女は門前払いを喰わされる。すべてが「規則」どおりに進められ，例外への対処は，旧東ドイツにはなかったようである。しかし，両親とも教育者であったカトリンの家は，実は旧東ドイツでは，いわば「特権階級」であり，この場合ももし両親が在宅であれば，「腐ってしまった社会主義」を逆用して，コネを使って手を廻せばビザはすぐにでも入手できたであろうと筆者には思われる。

結論として，祖母は家族に看取られることなく他界してしまったのである。カトリンはこの時，初めて大いなる無力感に襲われたという。過去，自ら，頭から信じきっていた国家が，実は自分（たち）から，何か大事なものを奪い取っていることに，初めて気がついたのだ，といえるであろう。この日から，カトリンはタイプAの人間からタイプBの人間へと変わっていった。自らが，実は「籠の鳥」であることを認識する，認めざるを得なくなったのであった。それは19才の夏だった。

一方のミリアム・ウルブリッヒは，ベルリンの壁に「面した」家，隣の家はすでに西ベルリン，という家に生まれ，壁の近くで成長している。父親は東ドイツ映画界の大物プロデューサーであり，生活に不自由はまったくなかった。自宅もDEFAと呼ばれる国営撮影所の近くにあった関係から，高校生のときから映画のエキストラのアルバイトにかり出されていたという。彼女はこうして自らも映画の世界に興味を持つようになり，結果として22才になった1984年，「東ドイツ映画テレビ制作大学」に入学したのだが，実はそこまでには紆余曲折があった。彼女は大学に入学して映画の勉強を始める前に，実社会を見ておこうと，高校時代からアルバイトしていたDEFA映画撮影所の正規の職員となり（父親の後押しがあったであろうことは容易に想像できる），見習い制作スタッフとして仕事を始めたのである。この時期から，彼女はさまざまな仕事をこなしていくうちに，このまま東ドイツにいても将来は切り開かれないのではないか，もっと別の，自分が知るに値する世界があるのではないかという意識が，いつのまにか心の中に湧いてきているのに気付いたと言う。しかし彼女は，この時点では，国を出ようなどという「大それたこと」は考えたりはしていない。むしろ，現在の体制の枠内で自らを伸ばそうという，ある意味で優等生的な考え方で，友好国チェコ，プラハの映画アカデミーへの入学を試みる。その高い倍率，競争を乗り越えて，ミリアムは試験に合格したのである。ところが，最後の最後に

本論文冒頭

なって，このプランは暗礁に乗り上げてしまった。すなわち，いざ入学という土壇場になって，東ドイツ政府から出国の許可が下りず，プラハへ行くことができなくなってしまったのである。

ミリアムの出国許可がなぜ下りなかったのか，その理由は本書にもはっきりとは書いてない。しかし，当局としては，ミリアムがプラハへ行くことを希望した真の理由が，よめていたのではないか。かりにミリアムが，彼女自身が気付いてはいなかったとしても，早晩彼女が「西側の世界」を知り，「自由」に目覚めてしまうことを当局が推察していたのではないか，と考えたいと筆者は思うのである。

ミリアム自身は，学校で教え込まれる科学的社会主義とか，レーニンの教えを格別良いとも思わず，共鳴もしなかったそうであるが，教師たちの言う，「私たちは，この国にユートピアを現実に築くために生きているのです」という言葉だけは，額面通り受け取っていたということである。自分たちはこの国にユートピアを作ろうとしているのだと実際に信じ，それが，「西」よりも物質的に劣った「東」で生きるミリアムの精神的拠りどころになっていたのである。つまり，モノの豊かさでは「西」に負けるけれども，自分たちは一つの理想社会のために生きているんだという自負心が支えになっていたのである。すなわち，この時期までミリアムは，疑いなくタイプCの人間であったと思われるのである。しかし，そこで言われる「理想」なるものが何であるかを現実的に考えれば，たちまち行き詰まってしまうのは論を待たない。友好国チェコで勉強することさえ許されない社会が「理想社会」であるなどとは，まことに面白い論理ではあるが，それを肯定する人間は，普通はまずいないであろう。

ミリアムは大学卒業後，再び映画作りの現場に飛び込んだ。しかし，仕事を重ねれば重ねるほど，自分たちが信じてきた「理想」と現実とのギャップに，そのあまりの違いに驚き，苛立ち，失望せざるを得なくなってしまったのである。ことここにおよんで，ミリアムは友人と二人で，ブダペスト経由で西側へ亡命しようと決心し，その切符も入手して，着々と準備を進めていた。とうとうこの時点でミリアムはタイプDの人間になったといえるようである。そこへ！，突然ベルリンの壁の崩壊の知らせが飛び込んできたのである。こうして彼女が苦労して秘密に立て，進めてきた計画は「水の泡となった」。彼女は今，ケルンに住み，西側社会で，正真正銘のプロデューサーとして世に出るべく研鑽中だそうである。

本書第1部第1章で，とりわけ興味深いのは，いったいどのような事情で，ベルリンの壁が開放されるに至ったかの，その顛末についてのコメントがあることだ。いったい誰が国境開放の決定を下し，誰からその命令が伝えられたのか，それが，実は旧「社会主義」国独特の秘密主義から，隠されたままだからである。国境の検問所の係官は，どの検問所でも，「自らの判断で，国境を開放したのだ」と，口をそろえて答えているというのである。面白い。非常に面白い。[2)]

本書72頁以下に，この点に関する記述がある。

「カトリンが描いてみせる国境解放劇の顛末はこうである。

おそらくクレンツの周辺では，国民の相次ぐ大量脱出や激しさをつのらせていく一方の民主化要求デモを前にして，この危機をひとまず乗り切るには早晩，「国境解放」という最後の切り札を切らなければならない場面がやってくるとはある程度覚悟していたのだろう。そして「旅行法」の改正についても大筋で合意に達していたはずである。しかし，その最後の切り札「国境解放」をいつ，どのような形で国民に向けて発表するのかといった細部に至る計画までは練られていなかったに

本論文冒頭

ちがいない。

ところが運命の11月9日夜，改革派の政治局員ギュンター・シャボフスキーが記者会見の終りしなにイタリア人記者の質問に答えて「これから東ドイツ国民は自由に出国ビザをもらえるようになる」と旅行法改正の内容にふれたことから，シジュホスの石が坂を転げ落ちていくように，すべてが思いがけない方向に急展開していったのだ。あの時，シャボフスキーが上着のポケットから無造作にとりだして読みあげたメモは，ほんらいならまだ公表の段階にないものだったのかもしれない。シャボフスキーとしては，ただ旅行法がいずれ改正されることを明らかにするだけで，その内容にまではふれないことになっていたのかもしれない。

ところが，記者団からの質問がひと通り終わり，気詰まりな会見を無事こなしたという，ほっとした気分から，はりつめていた緊張がゆるんで，つい，イタリア人記者の質問にも無防備のままのぞんでしまったのだろう。カトリンが，テレビニュースで記者会見の模様を見ていて，シャボフキーの発言がとても重大な事柄を口にしているとは思えないほど淡々とした口調に感じられたのも，彼の言い方が妙に舌足らずで，発言の意味するところがいま一つ呑みこめなかったのも，あの発言が，その場の雰囲気に気をゆるした予定外のものだったからのように思えてならなかった。

シャボスキーのひと言は，東ドイツの人々がこの28年の長きにわたってこらえにこらえてきた，籠の外に飛び出てみたいという衝動の，最後の閂（かんぬき）をはずすことになった。

テレビを見ていた人々は国境をめざして，われ先に検問所に押しかけた。おそらく国境警備隊の当直士官には，それぞれの状況を判断して適切な措置をとるようにといった曖昧な内容の指示は出されていても，何時から国境を開けろという具体的な命令は出ていなかったにちがいない。国境解放に踏み切るかどうかは，事態が収拾できないくらいに険悪化したさいのあくまで非常手段として各検問所の警備隊長にその判断が委ねられていたのだろう。

ところが，西をめざす人々の数はとめどもなくふくらみつづけ，迫りくる群衆の波に押し切られるようにして国境を開けざるをえなくなった。検問所によっては出国者たちがむりやり開けさせたところもあっただろうし，警備隊長が群衆のパワーに恐れをなして，解放を命じたところもあっただろう。」

計画によって動くことを特徴とし，またそのことこそを誇っていた社会システムが，最期には無計画によって，衝動的に自己崩壊したことは，まことに感慨深いものがあり，また，それゆえになおさら哀れをもよおすものであるといえよう。

1) 筆者は「社会主義国家体制が持つウミ」とは，あえて表現しない。旧東ドイツの国家体制が社会主義的に始まったのは確かであるが，少なくともベルリンの壁が崩壊する直前の東ドイツは，もはや社会主義などとは言えないと考えられるからである。（小山(1991)，旧東ドイツの大学における新しい経営学教育について，学習院大学経済論集第28巻第1号，pp.58-59参照）

2) 'Interessant, sehr interessant!' というのは，あまり良い意味ではない。ある意味で侮蔑の意味を含んだ表現で，にもかわらず滞独中筆者はテレビでこの表現を何度も聞き，おそらくこういう場合に使うべきなのだろうと考えている。

2－2 「脱出」および「再会」

第1部第2章は「脱出」，第3章は「再会」と題して，それぞれヘンリー（ハインリッヒ？）・ロイシュナー，およびベルント＆マリナ・リースラント一家を題材として（「脱出」），エベリン・シュミットを中心として（「再会」），話が進んで行く。この二つの章

本論文冒頭

は，前述の筆者の分類で言うと，根っからのタイプD（ヘンリー・ロイシュナー），タイプAからタイプDへ移ることとなったリースラント一家，そしてタイプA（エベリン・シュミット）と，この問題を考えるときにどうしても核心とならざるを得ないタイプの人々が扱われている。タイプAとは言ってもエベリン・シュミットは，著者の配慮からか，好意的に表現されている。映画監督であり，すでに公開されたいくつかの作品の監督である彼女は，限られた条件の中で精いっぱい抵抗を試み，自己に忠実に，体制に押しつぶされないように生きてきた人物である，とされている。見ようによっては，彼女を題材にした叙述が第1部の最後に置かれていることは，著者，杉山氏の思いやりとも考えることができよう。いかに「内実として」反体制的な意識を持っていたとしても，エベリン・シュミットのような立場にあり，旧東ドイツ政府から国外への旅行の自由を与えられていた人物は，どう割り引いても「平均的な旧東ドイツ市民」と呼ぶことは不可能だからである。そして，こういう人物について冷静に考え，意見を持つためには何がしかの準備，というよりも，はっきり言ってしまえば「頭を冷やす」ことが不可欠と思われるからである。こういう人物をいきなり頭から評価することは不適当であるからだ。

第2章，「脱出」の最初の登場人物の瓦職人，ヘンリー・ロイシュナーは，ミリアム・ウルブリッヒと同年，1962年生まれだが，彼はミリアムのような恵まれた家庭の人間ではなく，その意味で「平均的旧東ドイツ市民」ということができそうである。しかも彼は，名高い「PM12」と呼ばれる特別身分証明書の交付対象者である。この証明書を持っていると，外国はもちろんのこと，東ドイツ国内でも自分が住んでいる町を出ることがいっさい許されなくなる。ヘンリーがこの「PM12」を交付される対象となった理由については，著者杉山氏も，本人の弁を信じかねているようであるが，おそらく，当局に都合の悪いことを重ねて実行したことによる，と思われる。東ドイツ政府にとっての「危険人物」というわけである。イェナという地方都市に蟄居させられていた彼は，1981年4月，友人とともに70キロ離れた国境へと赴く。そして，恐いもの知らずの若者らしくというか，強引に国境を越えようとするが，仕掛けてあった爆弾が炸裂し，左足のふくらはぎをほとんど失うという重傷を負って逮捕される。その後，刑務所暮らしが続くが，出所後も反体制運動を繰り返し，Weiβer Kreis（ヴァイサー・クライス）と呼ばれる運動を以前にも増す熱意で繰り広げたのである。これは表現の自由などの市民の権利を要求する運動だったということだが，そのうちついに彼はStasiによって，「合法的」に国外退去処分となり，西ベルリンへと転居させられることなるのである。

一方のリースラント一家は，夫のベルントが東ベルリンのフンボルト大学講師，その教え子だったマリナは同じ大学を卒業し，英語の通訳として，東ドイツ国営翻訳会社たる「インターテクスト」へ就職が内定していたにもかかわらず，ある日突然その内定を取り消される。そしてその理由は，当然のことながらけっして知らされない。しかたなく彼女は別の就職口を捜すことになり，「ロボトロン」という国営コンピュータ会社に，やはり英語の通訳・翻訳家として採用される[3)]。

フンボルト大学を卒業して最初はインターテクスト，ついでロボトロンに内定をもらうくらいであるから，彼女は，能力に関しては申し分のない人物であるということができよう。しかし，ロボトロンにせっかく入社したにもかかわらず，彼女は書類の整理とか，掃除などの仕事しかさせてもらえない。そしてその理由を問いただしても，答をもらうことはできないのである。しかし，ひょんなことからすべての事情が明らかになる。ベルント

本論文冒頭

が大学に同僚といるとき，偶然その同僚へかかってきたインターテクストからの電話の内容をその同僚がこっそりと知らせてくれたのである。それによると，マリナの親戚が西ドイツに住んでいることが問題とされた，ということだったのである。その他にも，マリナの弟が西への移住希望書を提出していることも大きな原因だった。弟のことはまだしも，西ドイツに住んでいるという親戚は，壁ができるまえから住んでいるのであり，東ドイツから移住したのではないところが，なんとも納得のいかないことだった。すなわち，本人の努力，能力などとはまったく無関係に評価が行われてしまうのであった。

そうこうしているうちに子供が病気になり，マリナは家にいなくてはならなくなるし，大学を辞めてフリーの立場で自らの能力を生かそうとしていたベルントも，マリナの親戚が西ドイツにいるという，同じ理由で，仕事を得られなくなってしまったのである。タイプAから一気にタイプDへと移ってしまったベルント，自分の意思とは無関係にタイプDにならざるをえなかったマリナ，こうしてリースラント一家は西側への移住希望書（東ドイツ国籍離脱書）を公に提出し，ある日突然友人たちの前から姿を消す。

第3章「再会」は，最も考えさせられる章である。DEFAの映画監督であり，すでに地位も名誉もほどほどに手にしているエベリン・シュミットにとって，壁の崩壊が，さして新しい「お土産」を持っては来ないことは，さきにも簡単に述べた。そのエベリンの親友であるガービー（ガブリエレ）をめぐる話が，この章での中心である。彼女の夫は壁が開放される5年前，彼女と一人息子のアンドレを残して西ベルリンへ移って行っている。そして，壁が崩壊したその日，アンドレは父の住む西ベルリンへと，あっさりと行ってしまったのである。心の中に，「後からむりやり貼り付けられたもの」を持たない，少年の行動は，東と西の問題への単純かつ明快な解答だった。夫のギュンターと妻のガービーとの間では，「東ドイツにいては見られないもの，聞けないものへの憧れ，すなわち，自分の目で見，自分の足で歩きたい」というギュンターの考え方をめぐって対立があったという。自分自身の希望通りにほぼ物事が進んでいるタイプA人間のガービーにとってはそんなことは（建て前として）不要なことだったのだが，それははたして彼女の，心からの本心だっただろうか。ギュンターは，それは彼女が，籠の中から出られない自分を慰めるために無理矢理自分自身にそう思いこませているだけのような気がしていたという。国境が開いた後，アンドレが東ベルリンのガービーのもとへ戻って，彼女からの電話を受けたギュンターの，彼女への言葉は，まことに重みがある。

「これでもう，きみたちが隠れるものは何もなくなったね」

これ以上はっきりとした言葉はあるまい。著者，杉山氏が述べているとおり，東ドイツができて以来，イデオロギーや党のあとにつき従っていれば，市民には何事も約束されてきた。仕事の場でも，学校でも，考えなければならないことは，すべて党が肩代わりしてくれた。それは，言うなれば，市民にとってはすべてが「暗記科目」で，なにか事象が起こったときには，いちいち判断せずに，自分が暗記した範囲内ですべてを一種の反射によって処置すれば良かったことを意味している。しかし，暗記したそのようなものによる処置にはおのずから限界がある。たとえば，数学の問題を解くために，夥しい数の例題を暗記したとする。それによって，大学の入試問題をある程度まで解くことはできるであろう。しかし，暗記できる例題の数には限界がある。それ以上のレベルにチャレンジするためには，やはりオーソドックスな，論理的思考による問題解決へと向かざるを得ない。こ

本論文冒頭

のような暗記による方法が数学の勉強方法としては誤りなのと同じように，ガービーたちのような生き方では，人間の進歩は止まり，同じレベルでいつまでも，同じところをぐるぐる回ることしかできないのである。自分自身の判断，自らの責任で，自らのリスクで意思決定を行い，それによって，それに見合った報酬を受け取る，つまり，頼れるのは自分だけなのだ，という論理を，ギュンターはガービーに教えたかったのだという。目をそらさずに「真実」を直視すること，その大切さを，ギュンターはガービーにわかってほしかったようである。

ギュンター自身は元来タイプBの人間だったかもしれない。そして実際それを実行して，西ベルリンへ移ったのである。

[3] ロボトロンというのは，西側諸国が対共産圏先端技術輸出禁止措置をとっていたためにしかたなく，「血の出る思い」で自己開発した東ドイツブランドのコンピュータ会社である。筆者もドレスデン工科大学で日本企業論に関する講演を行ったときに目にしたが，ここのコンピュータは20年遅れクラスのものである。ただし，その社員たちはエリートであり，限られた成績優秀者のみが採用される，「優良企業」である。

2－3　「消えない過去」の悲劇

第1部の最後の節，「冬の童話」は，この話の締めくくりである。エベリン・シュミットに代表される旧特権階級は，歴史の事実をけっして真に認めようとはしない。エベリンは，東ドイツという国がこの地上から消えても，東ドイツ国民としての身分証明書はいつまでも持っていたいと言う。「金やモノが権力を持つ社会になる中で，心まで西に身売りしたくはない。せめてアイデンティティはこのまま東の人間でいたい」そうである。ここまで来ると，すでに宗教の世界である，ということもできる。教育とは無力なものであるが，しかし恐ろしいものでもあるということを，身をもって教えてくれていると言えよう。宗教の世界での問題というのは，実質的にほとんど無宗教である我々日本人には絶対に理解できないものも多い。そして，旧社会でエリートとして活動してきた人間たちにとって，ホーネッカーたちによって教えられてきた「疑似社会主義」は，いうなれば「教典」であり，その正邪とはまったく関係なく，それにしたがって動くことが正義である，ということになる。さらに彼らは，おそらく本当に，その「教典」に従って動けば，ホーネッカーたちが唱えていた「ユートピア」が達成されるのだと信じ込んでいるのであろう。ここに病根の深さがある。ガービーなどは，都合の悪いものには目を閉じて，美しいものだけを見てきたから，という意味で，まだ救いようがあると言えるだろう。こういうタイプの人たちは，「教典」に従って動けば，ホーネッカーたちが唱えていた「ユートピア」が達成されるのだということに「してある」ということで，真実を見ることによってそれを理解する可能性があるからだ。ところがエベリンのようなタイプのタイプA人間にとっては，ことは複雑になる。彼女たちにとっては，過去は消えないのである。あるいは「消したくない」と言った方が適切かもしれない。あたかも，大政奉還で身分制度がなくなった明治維新の旧武士階級の不満分子を彷彿とさせる風景である[4]。

東西統一以後の旧東ドイツ市民の大半は，本書で著者，杉山氏が述べている，西側へ移った直後のギュンターの戸惑いと同じ状態にあったと思われる。ギュンターが西へ来ていちばん戸惑ったのは，自分で自分をどう扱ってよいのかわからなかったことである。西の競争社会の中では，たよれるのは自分ひとりである。ところが，彼は，何より彼自身が自分をまったく知っていないことに気付かされたという。いったい自分はどういう特技

本論文冒頭

があって，どういう欠点があるのか，社会の中で自分は相対的にどういう位置にあって，どうすればいいのか，自らの判断をするすべを知らなかった，ということである。そして，この点についての資本主義と旧東ドイツの体制との実に上手い比較が，本書247頁から250頁まで，展開されている。ここを読むだけで，読者は両者の根本的な違いを認識することができるであろう。筆者の生硬な紹介などでは，これはうまく表現できない。自ら読まれることを心からお薦めする次第である。

この締めくくりの節の「冬の童話」というタイトルは，ハインリッヒ・ハイネの作品名で，「夜，ドイツのことを考えると眠れなくなる」というくだりがあるそうである。ギュンターにとって，ドイツという言葉は「故郷」という意味に近い，と，本書からは判断される。彼は東ドイツを自分の故郷と考えたことは一度もなかったという。故郷というのは，彼にとっては「空が青く見られるところ」，すなわち，青いものが本当に青く見えて，それが実物以上のものにも，そして実物以下のものにも見えない世界，なのであろう。ギュンターの，かつての東ドイツの友人の画家が言ったという，「空はどこに行っても青い」という言葉の誤りを彼が指摘した，その意味からして，このように判断されると思われる。

筆者は本書の著者，杉山氏が1991年５月に行った，このテーマでの講演を聴き，同氏の旧東ドイツ地域に対する危機意識に心から共鳴したものである。本書はそのような危機意識をかかえつつ，公刊されたものである。自らの目で確認した旧東ドイツの荒れよう，おそらく被ったであろう不便など，それを直視して得た経験に裏打ちされた本書の叙述は，まことに説得力に富んでいる。タイプＡの人間たちの代表は，いわゆる旧 STASI のメンバーだと言えるであろう。講演のとき同氏が繰り返し危惧していたこの問題は，今現実になりつつある。旧東ドイツの国営企業の民営化に際して，タイプＡの人間たちは，大半が上手く立ち回って，新しい組織内で横滑りしてしまったのである。外見だけ，看板だけ換えて，内実はまったく変わらないという非常に危険な状態が，現実になっているのである。６月にドイツ信託公社のブロイエル総裁が来日し，外国企業による旧東ドイツ国営企業の買い取りの宣伝を行ったときも，中間管理職以上の人材に関するこの問題について質問が出たとき，彼女はお茶を濁してしまった。経営者労働市場などというものが存在しない旧東ドイツのこととて，旧体制のもとでは管理者レベルの立場にあった人間は，そのほとんどがタイプＡの人間だったわけであり，しかも往々にして彼らは STASI でもあったように見えるからである。そして，皮肉なことに旧東ドイツ社会でもっとも強いインセンティヴのもとに活動していたのが彼ら STASI であったようである。この意味では，有能な者は，過去を消したくない者であり，「働く能力のある者は，けっして熱心に働こうとはしない」という妙なジレンマに陥ることになる。タイプＤの労働者たちは，結果として置き去りにされてしまい，不満がうっ積する，ということになる。

過去40年以上にわたり，『真実』を直視する目をそむけ続けてきたことによるツケが，今旧東ドイツ市民の上に重くのしかかっている。その背景，事実，そしてそれにより学びうることを，本書は教えてくれる。著者，杉山氏が『真実』を直視して書き綴ったこの本は，旧東ドイツ社会が持っていた（そして持っている）病巣を，我々読者に，常に自らの頭で考えさせながら知らせてくれているのである。昨今往々にして見られる，旧共産圏諸国での事業に対するアドヴァイザーを装った，金儲けをもくろむ楽観主義者などとは異なった，著者，杉山氏の辛口の論評に，同じように旧東ドイツの裏側を見て巡った人間と

して大いに賛意を現すと同時に，間もなく公刊されるという次作に，心から期待したい。

4) 「身分は武士でなくなっても，心までは百姓・町人などになろうとは思わぬ云々」の，時代錯誤の，当時の発言が，それにあたる。

本論文冒頭